

# 日本と中国における小学校英語教育の現状と課題

陸 君<sup>1</sup>  
石丸千重乃<sup>2</sup>

## 序論

平成15年3月に文部科学省により『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』が打ち出された。そのなかで指摘されているように、経済、社会の様々な面でグローバル化が急速に進展し、今日本では、人、物、情報、資本などの国境を越えた移動が活発となり、国際的な相互依存関係が深まるとともに、国際的な経済競争が激化し、果敢な挑戦が求められている。また、地球環境問題など人類が直面する地球的規模の課題の解決に向けて、人類の英知を結集することが求められている。こうした状況の下では、絶えず国際社会を生きるという広い視野とともに、国際的な理解と協調が不可欠になっている<sup>1</sup>。

国際的には、国家戦略として、小学校段階における英語教育を実施する国が急速に増加している。例えば、アジアの非英語圏を見ると、1996年にタイが英語科目を必修化し、97年には韓国、2001年には中国が段階的に必修化を開始した。EUにおいては、母語以外に2つの言語を学ぶべきとし、早い時期からの外国語教育を推進している。例えば、フランスは2002年に英語を必修化の方針を決定し、2007年から実施し始めた<sup>2</sup>。

一方、日本では文部科学省が2013年の10月23日、小学校3年生から英語教育を開始する方針を固めた。2011年度から公立小学校の5、6年生において必須となっていた「外国語活動」を、

正式に教科に格上げする。初等教育の段階からグローバル化に対応した教育を充実することで、世界の中で戦える人材を育成することが狙いである。東京オリンピックが開催される年と同じ、2020年までの実施を目指すという。

文科省が定めた小学校英語学習指導要領の目標は、外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うことである。実施は小学校5、6年から、主に外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること、外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くことと、異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、異文化に対する理解を深めることである。

また、文科省の「小学校英語活動実施状況調査」によると、公立小学校の総合的な学習の時間において約8割の学校が英語活動を実施しており、特別活動等も含め何らかの形で英語活動を実施している学校は93.6パーセントに及んでいる。6年生では、英語活動を実施している学校のうち97.1パーセントが「歌やゲームなど英語に親しむ活動」に、94.8パーセントが「簡単な英会話（挨拶や自己紹介など）の練習」に取り組んでいる。また、73パーセントが「英語の発音の練習」を行っている。年間の平均授業実施時間数は第6学年で13.7単位時間（1単位時間は45分）である。

しかし、小学校3年生から英語教育を導入す

1 京都文教大学 臨床心理学部 教授

2 金沢市押野小学校 英語インストラクター

ると、様々な問題が浮かび上がることも現実である。たとえば、肝心の英語が使える教員をどう確保するのか、免許は小学校専科とするのか、期待される早期英語教育効果はどう設定するのか、ネイティブの外国人教師をどう活用するのか、などなど。

一方、中国において小学校の教育課程上に外国語教育の一環として英語教育が登場するのは、文化大革命終結直後の1978年から80年にかけてである。当時は、10年間の人材育成の空白部分を一刻も早く取り戻すために都市部を中心に重点学校制度が施行され、高等教育に進む人材を早期から確保する政策が採られていた。2001年9月に中国教育部に出された新課程方案（試行案）によって、小学校に外国語の教科を設けることになった。ここ二年間の上海の小学校での視察から得られた結果では、一年生から英語学習が始まり、教員は英語専攻の師範大学か総合大学の卒業生であり、35分の授業はほぼ英語だけで行われている。

日本と中国にとって、英語は同じく外国語であり、国際競争にさらされるという状況も似ている。それぞれ小学校から英語教育をどのように取り入れているか、どんな成果をあげたか、またどんな問題を抱えているかについて、今回は石川県の金沢市立押野小学校英語インストラクターを10年以上勤めている石丸千重乃さんと共に、中国上海での現地調査から得たデータを参考にして、今の日本と中国の小学校英語教育を比較し、問題解決の出口や改善の提案を示したいと思う。

## 第一章 日本の小学校における英語教育の現状と課題（石丸千重乃）

日本の文部科学省指定の研究開発学校や構造改革特別区域研究開発学校（以下、研究開発学校という。）において、教科として英語教育を実施している公立小学校も増えつつある。平成17年度の文部科学省指定の研究開発学校のうち77校が、また構造改革特別区域については55の自治体が、教科としての英語教育に取り組んでいる。さらに、私立小学校全194校のうち、平成17年度に英語教育に取り組んでいる学校は、

文部科学省による調査に対して回答を寄せた148校のうち135校である。これらの学校からは、小学校段階で英語教育を実施することによって、英語に対する関心・意欲が高まったことや、スキル面で一定の成果があったとの報告がなされている<sup>3</sup>。

英語教育特区の金沢市の取り組みについて、英語インストラクターとして、以下のような紹介と提言をしたい。

### 1. 英語教育特区としての取り組み

平成16年度、英語教育特区の指定を受けた金沢市は、市内全小学校の3年生以上で、英語を週1時間の教科としてスタートさせた。私自身は、県立高校の英語教諭として14年間勤務した後、英語インストラクターとして、金沢市の小学校英語教育に初年度から関わってきた。平成24年度で、勤務は9年目になる。

まず、金沢市の小学校で行われている英語の授業について、概略を記すことにする。授業は、英語インストラクターと担任教師の二人一組で行われる。英語インストラクターは、英語を専門的に学んできた非常勤の指導者である。原則として各小学校に1名ずつ配置されているが、小規模校の場合は、2～3校を掛け持ちするインストラクターもいる。週1回の授業は、Team Teaching (TT)で行われる。授業案はインストラクターが作成し、担任教師と検討して決める。小学3～5年生には、金沢市教育委員会発行の副読本「Sounds Good 1」と「同2」を使っている。小中一貫英語教育を標榜して、小学6年生には、中学校の教科書「New Horizon」を前倒しして使っている<sup>4</sup>。

また、他教科と同様に、成績評価も行う。3・4年生は、「関心・意欲・態度」「表現」「知識・理解」の3観点で評価する。5・6年生は、「言語・文化の理解」という項目を加えて、4観点で評価する。評価の基になるのは、授業での様子と、ワークシート、リスニングテスト、スピーチ、インタビューテストなどの結果である。6年生については、中学校の内容を先取りしている関係で、単語テストや本文の読みテストの結果も、評価に加味している。私の勤務校の場

合は、インストラクターが評価の素案を作成し、担任が通知表につけている。

このように金沢市は、全国に先駆けて、小学3年生から教科として英語を教え始めたわけだが、特区スタート以前にも、1年に数回、全学年、教科としてではなく英語活動を行っていた。それを引き継ぐ形で、小学1・2年生には、年10回の英語活動がある。英語を身近に感じることに指導の重点が置かれ、担任教師が、挨拶や動物・野菜・果物の名前や色などを楽しく遊びながら指導している。年に2回ほど、インストラクターが授業に加わる場合もある<sup>5</sup>。

さらに、小学校の全学年で、始業前の15分間の朝学習を、週1回は英語に充てている。前回の復習や、アルファベットを書く練習などを、担任が指導している。

## 2. Team Teaching

平成23年度から、小学校5・6年生を対象に、文科省の英語ノートを使った授業が全国で始まった。ここでの授業は、原則として、担任教師が単独で行う。しかし、小学校教諭には、英語教育について専門的に学んだ経験のない人が多い。自分の授業に自信を持っていない人も多いであろう。小学校英語教育における最大の問題は、指導者の質である。この事実は、昔も今も変わっていない。

こういう状況の中で、金沢市が採用した英語インストラクターと担任教師によるTT体制は、画期的であった。その理由を、現場の実感から挙げてみよう。

英語は、音楽や図工などと似ており、専門知識を必要とする教科である。長期の研鑽を積み、技術を習得していないと、正しい知識や技術を教えることはできない。その意味で、インストラクターの存在意義は大きい。第一に発音である。小学校英語の語彙は基本的なものだけだが、たとえ英語のCDがあっても、発音は専門の人間がするに限る。生で発音する様子を見れば、口の形や舌の位置も非常に分かりやすい。何度も繰り返すのも簡単である。第二に、表現の微妙なニュアンスである。自己紹介の文作りをする時などには、英語表現の細かいニュアンスに

も適切なアドバイスができる。第三に、インストラクターが仲立ちすれば、日本語を話せない外国人を招いて授業に参加してもらうこともできる。このように、専門の指導者の存在は、英語学習の基盤となる楽しさを伝え、好奇心を育て、正確な知識を与える上で、不可欠なのである。

非常勤のインストラクターだけでは足りない点は、担任が満たすことができる。TTにおける担任の存在は、授業を円滑に進める環境作りの上で重要である。小学校の授業のほとんどは、担任教師一人が行う。TTでは、慣れ親しんだ担任がそばにいたので、児童は、担任の雰囲気を感じながら、安心感を持って学習することができる。さらに、担任は個々の児童をよく分かっているので、学習の理解度や積極性の点で、その子にサポートが必要かどうかを、インストラクターに助言できる。ペア活動で誰と誰を組み合わせるかについても、細かい配慮が可能である。

2人で行うTTならではの利点も見逃せない。外国語の学習は、元来、大教室で大人数を相手に行うには適していない。高校や大学での講義形式ならいざ知らず、コミュニケーションをとることを主眼にした小学校の英語学習では、今の日本のクラスサイズには無理がある。まさに、そのような環境において、TTは非常に効果的な指導方法だと実感できる。例えば、40人クラス全員の発音をチェックするとしても、指導者2人で分担すれば短時間で全員の確認ができ、節約できた時間で、児童の発話量や回数を増やすことができる。理解の遅い児童には、指導者1人が張りついて支援することもできる。英語の書き取りを授業後に採点する場合も、インストラクターがノートをチェックすれば間違いがないし、多忙な担任の負担を軽減することにもなる。

今や小学校英語教育の充実は、全国的要請となった。効果を期待できる授業方法としては、金沢市で行われているこのTT体制が最良ではないかと考える。

もちろん、TT体制が最初からスムーズに行えたわけではない。英語に苦手意識を持つ担任もいた。小学校英語教育の意義に、強い疑念を

持つ担任もいた。また、TTでは、綿密な事前の打合せがないと、授業を円滑に進められない。多忙な担任を相手に、打ち合わせ時間を確保するのはかなり困難であった。お互いわずかな空き時間を見ついたり、伝言メモを活用したりと、打ち合わせには工夫を要した。

このように苦勞しながらも、2人でアイデアを出し合って協力を密にすれば、より創造的で分かりやすい授業を組み立てられることが、授業をするごとに強く実感できるようになった。担任の方も徐々にTTに慣れて、インストラクターの英語を真似て繰り返して言ったり、自信のない英語の言い回しを確認したりしながら、英語を使うことを進んで試みるようになっていった。

また、TT体制の確立には、金沢市が実施する英語教育研修会が役立った。授業の質向上のためのTTのノウハウや、教室内で指示したりする時の英語(classroom English)等の理解を深めるのに役立っている。インストラクターが対象の研修会は、最近は頻度が減ったものの、当初はほぼ月1回のペースで行われていた。アイデアの共有や授業改善に、非常に効果的である。

### 3. 中学校教科書の前倒しは効果的だったか？

さて、以上のような状況のもとで、より良い授業を目指して毎年努力を続けてきた。にもかかわらず、多くのインストラクターは、3～5年生に比べて、6年生の授業がやりにくいと感じていた。これは、テキストの構成に起因するものかもしれない。3～5年生が使用する「Sounds Good」(金沢市教育委員会発行)の内容がTopic Base(場面ベース)であるのに対し、6年生が使用する「New Horizon」(東京書籍)はGrammar Base(文法ベース)になっている。

場面ベースの授業は、一例をあげれば、次のように展開される。例えば、動物の名前を学習する単位では、好きな動物の名前を質問し、児童がそれに答えるという場面を設定する。「What animal do you like?」と繰り返し発問すると、文法的な説明をしなくても、子供達はセンテンスの意味とWhatの意味を自然に理解して覚えていく。別の単元で教科名を学習する時は、好

きな教科を尋ね合う場面を設定する。ここでは、「What subject do you like?」と、前とよく似た発問をするので、Whatを含む疑問文の形は、一層定着しやすくなる。このように、分かりやすい場面を設定し、何度も繰り返して聞き、話し、慣れることで自然に身に着いていくのが、場面ベースの長所であろう。場面ベースの授業は、小学生に適している。

一方、小学生向けの文法ベースの授業では、様々な活動の中で、大切な文法事項の入ったフレーズを使うことでそれを定着させようとする。しかし、書いてまとめるという段階を省略すると、次へ確実に繋げていくことが難しいように感じる。小学6年生は中学生に近い年齢とはいえ、板書した英語を正しくノートに書き写すことはまだまだ容易ではないし、個人差も非常に大きい。特に30人を超すクラスでこれを一斉に行うのは、授業進行の点でもあまり効率的ではない。

外国語教育の指導方法としては、Listening → Speaking → Reading → Writingの順番に進めていくのが、学習しやすい自然な流れと考えられている。特に小学生ではこの流れが適切と思われるのだが、週1回の授業では、文法ベースの授業に欠かせないReadingとWritingを十分に行い、全員に文法を定着させるのは、なかなか難しい。

金沢市では、3年生から大文字を指導し始めるが、その際、基礎的なフォニックスも導入している。4年生では小文字を指導し、音を聞いて文字カードを並べ、milkなどの単語を作り読んでみる活動も、私は行っている。また、フォニックスの歌を何度も口ずさむことで、5・6年生になれば3～4文字からなる簡単な英単語なら自力で読める子も出てくる。しかし、6年生の教科書で最初に出てくるcome, playなどの言葉は、そのような基礎的なフォニックスの規則では読みづらいものが多い。そこで必要になるのは、漢字練習のように、何度も読んで書くトレーニングである。つまり、家庭での反復練習が絶対必要になってくるのである。たとえ週1回の授業でも、綿密に家庭学習を行う児童では、目に見えて成果が出る。しかし、それをす



べての子供たちに期待するのは無理がある。語学の最も土台となる部分が徹底していない児童は、今後の積み上げに大きな不安を残すことになってしまう。

#### 4. 小学校英語の意義と繋がる英語教育へ

8年間小学生に英語を教えてきた私だが、以前高校教諭だった頃は、実は早期英語教育に疑問を感じていた。小学校での仕事を始めたのは、早期英語教育に本当に意味があるかを、自らの実践で確かめてみようと思ったためである。

小学校英語の意義について、近年は、以前ほど賛否が分れることは少なくなってきた。しかし8年前は、教科として英語を教えることが小学生にとって良いことかどうか、多くの人が非常に戸惑っていた。ある大学教授が言ったことがある。「小学生に、Do you like ~?などを教えるためだけに、莫大なお金を使うことに、意味があるのか。」

しかし、実際に小学生に英語を教えてみると、子供の能力には、大人が想像するよりはるかに優れた面があることが分かり、非常に驚かされた。週1回の授業でも、小学生は本当によく覚える。それは、工夫した授業構成によるところが大きい。小学生が集中力を維持しやすいように、45分間の授業を3パートほどに分け、小学生が集中力を維持しやすい時間内にいくつもの活動を盛り込んでいるからだ。また、間違ふことへの抵抗感の少なさや、照れずにどんな友達とも英語で関われる発達段階であることも大きい。中学生になれば、男女で話すことを嫌がり始め、間違ふことにも臆病になる。そうになってしまうと、ペアワークや交流活動を楽しく行うのは難しい。小学校時代に様々な活動で、積極的に英語を声に出す体験は、長じて、英語での自然な応答をできることに繋がるのではないかと思う。

今後、より盛んになるであろう小学校での英語教育が、中学校、そして高校での英語教育にスムーズにつながるために、私は、発音記号をもっと活用したらよいと考えている。実際のところ、十数年前には既に、中学校でも発音記号をしっかり指導しなくなったようだ。そして今

は、簡単に英語のCDが手に入り、電子辞書で容易に発音を聞ける時代である。しかし、辞書に必ず載っている発音記号は世界共通であり、音声が入らないときにも、記号の意味を知っていれば発音が分かる。どんなに長く難しい単語でも、自分で発音してみることができる。英語初級者の小学生は、聞き取り能力は優れていて、音を真似ることは上手だが、発音記号を理解し辞書などで論理的に読み取って実践するのは、かなり困難と予想される。しかし、中学校に入れば、語彙数がぐんぐん増える。高校英語では、自分で予習して、どんどん読み進めなければならなくなる。現在、余り重視されなくなった発音記号を使えることは、自分で学習する力を高め、応用力も養うのではないだろうか。授業以外で英語に触れる機会が少ない日本では、基礎的なフォニックスだけで、ネイティブスピーカーのようにどんな言葉も読めると考えるのは、幻想ではないか。

小学生のうちは、英語への関心を高めることを目的に、音声をつづり聞いて、大きな声で発話し、基礎的なフォニックスで文字と音を結び付けて読んでみる活動を行う。中学校では、正しい発音の仕方や発音記号、体系だった基礎的文法事項をしっかり学習して、Listening、Speaking、Reading、Writingをバランスよく定着させる。このような学習によって初めて、高校・大学での自立した学習者へと成長する道が開けるのではないだろうか。

今や、中国も韓国も、小学1年生から英語をしっかり学習することが当然になっている。日本の英語教育も進化していく必要があるのは言うまでもない。そのためには、小学校から大学までの連携が非常に重要であると考え。子供たちが、今より分かりやすく英語を学習して、国際社会で気後れせずに自分の意見を英語でも表現できる社会人になるためには、あらゆる段階での英語教育関係者が、建設的な議論をしていく必要があろう。学習に適したクラスサイズ、指導者の質、テキストの構成や指導方法、4技能のバランス等々、議論すべき点はまだまだ多い。

## 5. 金沢市の小学校英語教育の指導内容と活動例

金沢市で平成23年度まで実施してきた各学年の学習内容と、成功した実践例を、学年別にあげておく。

表1-1. 小学3年生の学習内容

挨拶 年齢	How are you? I'm fine (happy/great/sleepy/thirsty/tired, etc.). Nice to meet you. etc. I'm 9/10.
動物	What animal do you like? I like monkeys (bears/dogs/birds, etc.).
食べ物	Do you like pizza (chicken/salad/ice cream/milk, etc.)? Yes, I do. / No, I don't.
文房具	Do you have a pen (ruler/stapler/book, etc.)?
数字	How many dogs do you have?
できるかどうか	Can you swim (fly/run/jump, etc.)?
天気	How's the weather? It's sunny (cloudy/windy/snowy/rainy).
12ヶ月	When's your birthday? My birthday's in April. etc.
好み	I like ~ / I don't like ~
スポーツ	play soccer/do karate/ski, etc.
大文字	A B C . . .

表1-2. 小学3年生の英語活動実践例

該当単元	内 容
挨拶等 多くの単元	色カードを数枚持ち、挨拶を交わした後、じゃんけんをしてカードの交換をする。
全単元	学習したフレーズを使って、互いにインタビューし合う。
大文字	歌やリズムに乗って、フォニックスの音や言葉を言う。
大文字	大文字ブロックを封筒に入れ、それが何の文字かを言い当てる。
天気	日本地図にいくつかの場所とその天気が書かれた2種類のワークシートを持つ。自分のシートでは分からない天気が分かるシートを持っている友達もいる。互いに聞き合いながら、すべての場所の天気を知る活動。
数字	児童は、0～9までの数字カードを2セットずつ持ち、1枚ずつ掛け声に合わせて取り出して2桁の数字を作り、その数字を英語で言う。次に、1人の教師が同様に2桁の数字を作ってカードで示す。そして、big とsmallと書いたカードを持っているもう1人の教師が、" big, small, big, small, 1, 2, 3" という全員の掛け声に合わせて1枚取り児童に示す。そのカードがもしbigで、児童の数字が教師の数字より大きければポイントになるという活動。

表2-1. 小学4年生の学習内容

季節	What season do you like? (spring, summer, fall/autumn, winter )
文具貸し借り	Do you have an eraser? (paper, scissors, glue他) Here you are.
時刻	What time is it?
様子(形容詞)	cold, hot, long , short, slow, fast
家族	Who's he/she? He's my brother. (family, father, mother 他)
住む場所	Where do you live? I live in ～
兄妹姉妹の数	I have 2 brothers他
教科	What subject do you like? I like math.( Japanese, science 他)
教室	Where is he? He's in the classroom. ( gym, nurse's room他)
動作	What's he doing? He's running./ swimming , playing soccer 他)
小文字	a b c . . .

表2-2. 小学4年生の英語活動実践例

該当単元	内 容
文具貸し借り	国旗の絵柄を利用する活動である。私は、絵柄の色使いが2～3色で、比較的シンプルなデザインの国旗を選んだ。(スーダン、ニジェール、イタリア、フランス、バングラデシュ、ハンガリー、タイ、イラク) 最初に、そのうちの4種類の国旗を、絵柄を隠した状態で黒板に張っておく。その4種類のうちのどれか1種類の国旗カードを、ペアの片方の児童に配布する。そのカードには国旗のデザインだけが書いてあり、児童は、黒板の国旗を調べに行き、塗りたい色の色鉛筆を、Do you have a red pencil? などと言ってペアの相手から借りる。すべて色塗りを終えたら、次はそのカードを切り取るためのはさみ、またそれをワークシートに貼るための糊を相手から英語で借りる。終了後、黒板の国旗も別の4種類に変え、ペアで交代して同様に進める。
動作	班で協力し合ってワークシートを完成させる活動。一人一人に渡したワークシートには、8人の人物の名前を書いておく。教室の色々な場所に、それらの人物の情報を書いた紙を情報が見えないようにカバーをして張っておく。その紙には、人物の名前(顔の絵)、どこにいるか、何をしているか、が書いてある。各班1人ずつ、どれか一人の人物の情報を調べに行き、班に戻る。その際、「～を調べたよ」(I checked～)と言う。待っていた班員は、「どこにいるの?」(Where is he?)「何をしているの?」(What's he doing?)と質問し、調べた子は英語でそれに答える。各自その答えをワークシートに書いていく。
教科	小学生の場合は体育や図工などが毎年多くの児童の1番人気となっており、お互いに聞き合って調べる甲斐が無いので、わざと2番目に好きな教科を友達と聞き合い、クラスのランキングを調べる活動
様子(形容詞)	非現実的なモンスターの絵を書き、それをペアで相手に英語で “ big nose / three eyes / long arms “ などと伝えて、相手もその絵を書いてみる活動。子供たちは、一体どんな絵になるのだろうとワクワクしながら言葉のやり取りができる。

表3-1. 小学5年生の学習内容

月日	My birthday's April 8th など
1日の活動時刻	What time do you get up? (go to bed/ eat lunchなど) I go to bed at 9 など
趣味	What's your hobby? My hobby's playing soccer. (drawing/ swimming など)
時間割	When do you have art? Monday, 1st period. など
どちらが好き	Which do you like, A or B?
職業	nurse, police officer, doctor, teacher など
位置	Where is a dog? It's on the bed. など
建物名前と道案内	Where's a school? Go straight/ Turn left / Turn right/ Stop など Police station/ post office / fire station など
飲みたいもの	What do you want to drink? Milk, please
数字	1000まで
英語のつづり	How do you spell it?
カード作り	簡単な英語を書いてクリスマスカードなどを作る



表3-2. 小学5年生の英語活動実践例

該当単元	内 容
飲みたいもの	飲み物や食べ物の小カードを用意し、クラスを2分割し、半分が店屋、もう半分がお客さんの役割になる。そして、実際に聞いたり注文したりする模擬買い物活動。
どちらが好き	スポーツの試合などで用いるトーナメント表を使ったワークシートを使う。 1 回目は、こちらで指定した言葉（例えば、pizza, chicken, spaghetti, などの食べ物）を書いておく。お互いにWhich do you like, pizza or chicken?などと質問し、相手の答えた食べ物が勝ち進んでいき、最終的に一番好きな食べ物が分かったといった活動である。聞き合う前に、相手の1 番好きな食べ物を予想し書いておく。このひと手間で、子供たちはそれが実際に当たるかどうか期待しながら一生懸命に聞こうとする。1 回目のトーナメントがすんだら、2 回目のトーナメント表に、今度は各自の聞いてみたいジャンルの言葉を書き入れさせて活動する。
位置	2 種類のワークシートを用意し、それぞれに同じ部屋の絵を大きく書いておく。それぞれのシートに指示された物（chair, table, fridge, bed など）を事前に書き入れておく。自分と違う物を書き入れた友達とペアになり、Where's a chair? It's by the bed.などとQ Aしながら、相手がどんな部屋になっているのかを聞きあう。
カード作り	初年度からアメリカNew York州のDelhi小学校へクリスマスカードを書いて送る活動をしている。その学校からは、毎年返事がしっかり返ってきて、1 枚1 枚こちらの児童の名前をDear Taro のように書いてあり、また、質問にもきちんと答えを書いてくれるので、子供たちは大感激である。現在の教育課程の中の限られた時間でこの活動を行うのは、かなり大変ではあるが、例文を示し単語リストも与えることで、初めて英語のカードを書く児童でも2～3時間で清書が仕上がる。そして、清書が終わった児童から、色画用紙でカードの表紙を作らせることにしており、各児童が絵、切抜き、折り紙やシールなど非常に工夫をして丁寧に仕上げる。これが、アメリカの子供たちにとっても楽しみになっているようである。児童たちは、実際のアメリカの同年代の子供たちの字を見て、印字と違うその読みづらさを感じたり、家庭の様子やペットの数に驚いたり、と異文化体験にもなっている。
趣味、職業	各単元の最後にスピーチをさせることが多い。それまでの学習のまとめとして約8文程だが暗記させて言わせる。

表4-1. 小学6年生の学習内容

Unit 1	挨拶 出身地などをQ Aしながらbe動詞を学習
Unit 2	this that itで教室や建物等を案内したり、he sheで友達を紹介したりする学習
Unit 3	一般動詞(like play have drive speak want 等)で自己表現やQ Aする学習
Unit 4	What で始まる疑問文とその反応の言葉を学習。形容詞( favorite, interesting, easy )を使い、好きな教科とその理由を言う学習。朝食についてQ Aする学習。

表4-2. 小学6年生の英語活動実践例

該当単元	内 容
Unit 2 This/thatを使う Q A	5年生で学習した建物の名前を使ったinformation gap活動が効果的であった。地図は全員同じもので、その中に5種類の建物を記号A～Eで記しておく。各シートごとに1つの記号の情報（A＝病院hospitalなど）だけを入れておく。各児童は、友達に新しい情報を聞き（Is this a school?など）、また自分の分かっている情報を相手に伝えていく（It's a school.など）。
Unit 2 友達紹介	6種類の架空の人物の名前を設定し、各カードには、出身地や自分との関係を選択できるように5～7個言葉を書いておく。児童は、同じ人物のカードでも異なる出身地や関係になることが可能で、活動時には、多くの種類の人物カードが出来上がっていることになる。互いにそのカードの人物を紹介（This is Takashi. He is from Osaka. He is my teacher.など）していく。
Unit 3	すごろくゲームの中で、各マスには動詞と言葉と○（肯定）×（否定）の指示を書いておく。児童は、止まったマスが「like リンゴ ○」ならI like apples.と言わなければならない。これは、学習段階に応じて、止まったマスでDo you like apples?と、次の順番の友達に質問し、その子がYes, I do. I like apples.と答えるQ A形式で行うこともできる。小学生は、やはりゲームの中でやり取りする方法が効果的なようである。
Unit 4 好きな教科と理由	5目並べも有効な練習方法である。4年生で学習した教科名を10マス×10マスに書き入れ、児童はペアで互いにWhat's your favorite subject?と質問し、答える方の児童が、ある1マスを選び印を書き、My favorite subject is English. It's interesting.と理由まで言う。そのようにして、5目早くとった方がポイントとなる。長くて言いにくい単語も、この方法で楽しみながら何回も練習することができる。
Unit 4 朝食についてQ A	世界のいろいろな朝食を知る活動を行うことが多い。週1回の授業では、子供たち自身に国を決めさせ、朝食を事前に調べさせるまでの時間は取れないので、こちらで8か国（モンゴル、トルコ、インド、ドイツ、ベトナム、マレーシア、フランス、イギリス）を選び、朝食を調べて絵や説明付きのカードを作っておく。1グループ1か国を担当させ、What do you have for breakfast? I have rice.などと互いに交流することで他国の朝食の情報を得ていく活動である。
まとめ 自己紹介スピーチ	5年生までに数回行ったスピーチでのフレーズに、6年生で学習した一般動詞を使った文も入れて自己紹介を書かせる。児童によって、量的にも質的にも多少上下はあるが、10文以上の英文を小学生の間に繰り返し練習してしっかり暗記しておくのは、将来必ず役立つ時がくると思う。

## 第二章 中国における小学校の英語教育の現状と課題

中国の英語教育は小学校3年（以下小3と記す）から必修となる。義務教育は小学校の6年間と中学校の3年間であり、この9年間に於いて必修として英語を学習することになる。高校に進学した場合、英語は続けて必修であり、また同様に、大学や大学院でも英語は必修科目となっている。

中国ではグローバリゼーションの大きな潮流に呼応する形で、小3からの英語教育が、すでに2001年段階で必修化されている。中国における小学校英語必修化の動きは、文革後に展開された改革開放政策の総決算としての2001年のWTOへの加盟、さらに同年に2008年の北京オリンピック開催が決定したことで軌を一にしている。そして2001年の「全日制義務教育英語課程標準」の実施によって、英語教育は小3から正式にカリキュラムに組み込まれ必修化されることになった。「課程標準」では、小3から後期中等教育にあたる12年生（高3）までを視野に入れた一貫した指導体系になっている。小3から実施とはいえ、北京、上海、天津、また全国の31の省都などの大都市では、ほぼ小学校1年生から100%実施されている<sup>6</sup>。

### 1. 小学校英語必修化に関する中国教育部の政策と社会環境

21世紀の到来を前に、中国ではさらに、国際化・情報化社会に対応する生涯学習思想にもとづく未来志向の教育改革像を「資質教育」として打ち出すようになり、これに伴うカリキュラム改訂は2001年7月に行われた。これに先立ち中国政府国務院は、「基礎教育の改革と発展に関する決定」（2001年6月）を公布し、さらにこれを受けて政府教育部は、カリキュラム改革指針としての「基礎教育課程改革綱要（施行）」（2001年6月）を公表した<sup>7</sup>。

小学校英語の教育目標は、2001年度からの新課程では、英語教育を、初等教育から後期中等教育にいたる（小学校・中学校・高等学校）12年間の一貫した指導体系として組み立てている点に大きな特徴がある。小学校英語は、入門段

階として「英語に対する好奇心や興味を養い、英語学習を楽しく好ましいものであると感じることから入り、簡単な英語による遊び・動作・作業、歌やロールプレイに楽しく積極的に参加し、初歩的なコミュニケーション技能を身につけるとともに、外国の文化や生活習慣に対する興味と理解を培うこと」が目標とされる。

この目標を実現するために、2001年のすべての教科のカリキュラム改革において、中国の教育部は New English Curriculum Standards (NECS) を発行した。これはスタンダードであるため、欧米で広く導入されつつある、語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格、Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) とは異なる。ただし、教授・学習・評価にわたって様々な情報が組み込まれている点においては、CEFRに類似している。NECSには、新しい英語教育の方向性として、タスク型のアプローチや総括的および形成的評価の方法などが、具体例とともにこの基準に組み込まれている。CEFRでは6レベルが設定されているが、NECSでは9レベルが設定されている。達成目標は各学校の裁量となるが、必要とされるレベルは、小学校ではレベル2、中学校ではレベル5、高校ではレベル7となっている。8と9は、ハイレベルな高校が到達目標にするためのものである<sup>8</sup>。

英語の学習時間に関しては、外国語学習の原則をふまえ、「1回の時間を短く、（英語に接する）頻度を高める」ことが重視され、毎週少なくとも4回以上の英語の学習活動を保証することになっている。このために、1コマ40分の授業時間を分割して、3、4年生ではショート・タイムを主とし、5、6年生ではロング・タイムとショート・タイムを組み合わせること、および正規の授業時間と課外の時間の双方を組み合わせることが推奨されている。課外の時間は、朝の自習時間や放課後を利用した英語の諸活動や補習、学校行事枠を利用した大型活動（フェスティバル、コンテスト）の展開など、各校の裁量で多彩かつ柔軟に行うことができることになっている。

もちろん、NECSは当時の教育現場の実態か

らみて難度が高すぎ、打ち出されはしたものの批判を受け、とくに小学校段階からの英語教育は、全国の大多数の地区で実施には至らなかった。批判の論点は、標準中国語ですら十分にマスターできていない年齢段階で英語を導入するのは時期尚早である、英語教育を実践できる教員が中等レベルですら圧倒的に不足しているのに初等段階での実施は無理であるなどの点であった。

しかし、このような中でも、条件の許す限り小学校における英語教育の先行的実験を止めなかった自治体があった。それは改革開放の気運の中で児童期からの英語教育に対する社会的ニーズの強かった上海市、北京市、天津市などの大都市（直轄市）と、同じく経済発展地域の広東省、青島市、無錫市等のほか、発展途上であっても実験に意欲的だった安徽省等である。その後、これらの自治体における初等英語教育の実践の蓄積、中等段階での英語教育の漸進的定着、21世紀に向けた資質教育の大方針の採用とそのための基礎的教育研究（英語に関しては諸外国の英語教育の実施状況調査、国内の初等～高等英語教育実践の総括）、IT革命の推進状況などを踏まえて、教育部は最終的に、2001年の新課程実施期から初等英語教育をカリキュラムに正式に入れることを決定し、新課程（試行案）を一部地域から段階的に導入して、2004年までに全国実施することを計画した<sup>9</sup>。その社会背景としては、中国のWTO加盟（2001年）、2008年の北京オリンピック開催決定（2001年）があり、社会一般、とくに父母からの熱心な初等英語教育の実施要求が、何よりも追い風となったという。

こうした小学校英語教育の必修化とともに、筆者がここ数年、科研費による上海への英語教育の現地調査で気づいたのは、書店で児童向け英語教材が多く販売され、それも書店のかなりの面積を占めていたことである。CCTVの24時間の英語ニュース番組や、中国人による英語の討論番組がテレビで流されているだけでなく、市民は多くの場所で英語に接することができる。日本のコミュニティセンターにあたる社区学校においても、成人や子ども向けの英語教育講座

が人気を集めており、そこでは大学の英語教員が非常勤として活躍している。中国では実際、それほど英語が日常生活で必要とされているわけではないが、英語が個人の能力を示す指標、あるいは資格試験の合格最低基準、就職試験の最低条件として使われているために、人々は英語を学ばざるをえない。英語は、いわば社会的な上昇のための必要最低条件となっているのである。たとえば、外資系や放送局など人気の高い企業・団体では、就職試験の参加資格として、大学英語試験6級以上（級数が上なほど難易度が高い）を設定するところもある。また大学4級に合格できないと、卒業しても学位の認定をしない大学もあるという。この試験については後で説明する。

2006年6月23日付 Guardian Weekly は、同年の9月のある日、中国では7歳から12歳の児童、およそ12万人が児童向けケンブリッジ英検、Young Learners English (YLE) を受けることになることになると報じている。YLEは、CEFRに準拠しているという意味で国際基準にのっとった児童英検で、リーディング／ライティング、リスニング、そしてスピーキングの三部門から成っている。所要時間は、YLE自体の内訳である初級、中級、上級に応じて、リーディング／ライティングが20-40分、リスニングが20-25分、そしてスピーキングが5-10分となっている。試験時間は、最短で45分、最長で1時間15分という計算になる<sup>10</sup>。

## 2. 小学校英語の実施状況と上海の視察事例

2005年9月現在の英語教育の全国的な導入状況について、中国の教育部によれば、小学校1年生から基本的に100パーセント導入しているのが北京市、上海市、天津市の各市であり、小学校3年生から基本的に100パーセント導入しているのが、沿海部（発展地域）の諸省、および全国31の省都（省・自治区・直轄市）である。全国の県の県庁所在地（農村部の中心都市）では、小学校3年以上から80パーセントが実施している。しかし、かなりの農村部の小学校では条件が整わず英語教育の実施に至っていない。農村部での実施状況を把握するのは困難であり、時間割に掲



載され報告されていても、そのとおりに実施されていないことも少なくない。また、中央教育科学研究所の小学校英語教育研究調査の専門家、張志遠教授によれば、非公式の推計データでは、全国の約50パーセントの小学校で英語教育が導入されているということであった<sup>11</sup>。

小学校の入門段階では、「見る」「聞く」「話す」のオーラル・コミュニケーションを中心とした学習活動を展開させることになっている。このために絵やアニメーション・英語教育番組などの視覚・視聴覚教材が活用され、歌・ゲーム・踊り・会話劇などが行われることになっている。高学年では中学年での学習活動を基礎に初歩的な読み・書きも導入するが、それはあくまでも前期中等段階での学習への基礎固めのためである。

授業形態は、教員による教科書中心の一斉授業と試験で知識定着をはかる伝統的な方式を改め、児童に英語学習への興味を湧かせ、英語を用いたコミュニケーションを楽しむ多彩な活動方式（ゲームや歌、ロールプレイなど）を採ることを推奨している。特に豊富な音声映像教材を使って、授業を効果的に進めることが奨励され、遠隔の農村部でもこうした視聴覚教材によって教員の人材不足、力量不足を補いつつ児童に学習への興味を持たせ、所定の学習を進めることが計画されている。教育部は、国家発展改革委員会、財政部とともに、2003年から「農村の小学校及び初級・高級中学現代遠隔教育プロジェクト」を進め、条件整備に努めている<sup>12</sup>。

中国教育部は授業目標や形態を定めてはいるが、各地の実施状況が現地の条件に従って多様化しているのも間違いない。

事例① 2012年9月に、筆者が上海で視察した閘北区第一中心小学校では、小一から毎週4回、35分の英語授業があり、教員はほぼ若手の女性が勤め、流暢な英語で進められていた。その小学校で見学した2年生の英語授業は、教歴11年のベテラン女性教員、戴先生による、35分の授業で、30人の子ども達との楽しい時間だった。授業はすべて英語で、先生が自作したPPTを見せながら発音や会話を練習し、子ども達は先生の言葉に生き生きと反応し、練習やゲーム

に上手に参加し、疲れたような姿は見られなかった。

使った教科書は、上海外国語出版社とオクスフォード大学出版社との共同制作による“Oxford English Shanghai Edition”だった。授業後は、担当教員や英語主任と一緒に、この小学校の英語教育について意見交換をした。この視察の内容は、研究論文「中国・上海地区における小・中・高校での英語教育調査報告書」（共著）、平成24年11月、立命館大学大学院言語教育情報研究科紀要・Studies in Language Science Working Paper 第2号（pp.1-18）に掲載されている。

事例② 2013年12月末に上海で視察した特別小学校・師範大学附属実験小学校の国際部（公立中の私立部門―筆者）で、2年と5年生の授業2つを見学した。教員は両方とも中国人女性で、生徒たちは外国のパスポートを持っているのが前提だが、大部分の子どもの両親は元・中国出身者である。また、他に中国に滞在している英語圏出身の親を持つ子どもや、日本人の子どもなども数人がいた。5年生のReadingクラスには16人の生徒がいて、指導していたのは師範大卒業後5年目の20代の女性教員、李先生だった。学生時代に1年間イギリスへ交換留学をした経験があり、授業は生徒達と一緒にすべて英語で進められていた。ちょうど学期末になり、前半は教科書「Diary of a Wimpy Kid, Book 2」の1課を復習するため、まずは生徒たちに本文の朗読をさせ、途中で単語の説明や発音練習をし、質問と答えの時間も設けていた。後半は「If」構文の復習をするために、自作したDVD Storyで「Jack's Holiday Plan」をPPTで紹介し、生徒達に「Holiday Plan」の練習活動をPairとGroupの2つの方式でさせ、教員は各グループを回って指導していた。最後は全員の朗読と音楽鑑賞で35分の授業を終了した。生徒達は積極的で、みんな楽しそうに参加していた。

2年生の授業は22人のクラスで、英語学習がまだ2年目の子ども達に教えていたのは、40代前後の女性教員、白先生だった。この先生は分かりやすい英語を話し、授業は全員が立って歌を歌うことから始まり、復習のために自作した



「Mario's Christmas Adventure Trip to Holiday Island」のDVDを見せながら、聞き取りやQuizを行ったり、Mario's Broken Letterをグループ活動で復元させたりした。最後は「Fruit Map」のゲームでMario物語のテーマである「人を助ける」ことをまとめ、元旦の休みのために「Do Something Good for Friends」の宿題を与えて、授業を終了した。

授業後、担当教員や英語主任らとの懇談で分かったのは、この国際部の教員は7人がNativeで、7人が地元の中国人教員だということだった。二つのチームが学期ごとに、3～4回のデモクラスを行い、授業の質や指導力を高める。使った教科書「Longman's Welcome to English Hong Kong edition」には、E-Bookも付いている。また、子ども達に読書の習慣を身につけさせるため、図書館で好きな英語の本を選んでBook Reportを書かせることも行っていた。

上海で見学した小学校の英語授業は、どちらも児童に英語学習への興味を湧かせ、英語を用いたコミュニケーションを楽しませるようなゲームや歌、ロールプレイなど、多彩な活動方式を採用していた。特に、担当教員が独創性を發揮して豊富な音声や映像教材を使い、授業を効果的に進めていることには感銘を受けた。

上海以外の小学校英語教育については、日本の研究者によって多くの現地視察報告が書かれている。ここでは、二つの事例を引用して紹介しておこう。

#### ①大連市開発区にあるA小学校一年生の例<sup>13</sup>

この学校は農民工子弟が80%を占める学校である。同地区は、大連の市街地から車で1時間ほど離れた地域にあり、多くの工場が建ち並び、商業施設や高層マンションの建設が盛んである。こうした都市建設のため、農村から来た多くの出稼ぎの人たちが働いている。A小学校は、彼らの子女が学ぶ学校である(2010年調査)。

1年生の英語の授業を見学した(英語の勉強を初めてから半年、40人のクラス)。担当は女性教師で、授業は以下の内容であった。①生徒たちはペアになり、持参した自分の家族の写真を使いながら「This is my father. This is my mother.」と英語で紹介し合う。農村出身者が多いせいか、兄弟姉妹がいる子どもも見受けられた。②職業(doctor, teacher, nurse)に関する

単語を勉強。③途中で一分間の休憩(全員一斉に机に俯して休む)。④小1バージョンのテキストである『英語(新標準)』を使用し、学習内容を深める。この時、教科書に合わせて開発されたCD-ROM教材を使用し、小型のノート型パソコンを生徒に見せて授業を行っていた。⑤登場人物用頭飾り(女子用)を使用して、生徒に黒板の前でスキットを演じさせる。子どもたちが楽しそうに授業を受けていたのが印象的であった。

同小学校の英語教員は、全員若い女性である。授業は、1年生から原則として英語だけの直接法での教育とのものであった。週2回の英語の正規の授業の他、補習もあるという。

#### ②吉林省の朝鮮族地域にある朝鮮族のB民族小学校の例<sup>14</sup>

同小学校では全国カリキュラムに従って、小学校3年から英語学習が導入されており、小学校5年生41人のクラスの英語の授業を見学した。(2011年調査)

それは完璧な直接法の授業であり、担当の若い女性教師は基本的にすべて英語で教え、ほとんど漢語や朝鮮語を使用しない。その上、児童のレベルも高く、それに問題なくついていっているように見えた。先生も、「間違ってもいいので、思い切って答えなさい」と励ましていた。子どもを元気づけ、積極性を喚起する姿は、教育関係者として見習いたいものである。授業ではPCを活用し、テレビ画面に「What does Chenjie do on Saturday?」、「A: What do you do on? B: I often.... A: What do /does...do on...? B:...often...with....」といった英語の例文が提示されていた。その後、構文について何度も繰り返し練習が行われる形のオーラル・スピーキングが中心の授業である。

以上のように、中国の小学校はほぼ公立であり、英語教員はほとんど中国の大学で英語師範や英語専攻卒の若手女性である。30人前後のクラスを一人で担当し、すべて英語で授業を行うことと、映像や音声を活用することが基本である。では、英語を使える教員はどのように養成されるのか? 採用に当たってどんな資格が必要なのか? 日本のようにNative ALTや英語の堪能な人とTeam Teachingの連携をせずに、質的な面で大丈夫なのか?

### 3. 中国の小学校英語教員の資格と養成

#### 3-1. 英語教員の資格

中国では1990年前後から、師範学校・師範大学卒業者を有資格者とし、それ以外の教員に対しては相応の学歴水準に達するための研修や資

格試験などを実施するようになった。こうした状況の中で教員資格制度の整備が要請され、1993年に「教師法」が制定された。同法により、次のような学歴に基づく教員資格が規定された。

教員資格の種類	学歴要件
小学校（第1～6学年）資格	中等師範学校（後期中等教育3～4年）卒業以上
初級中学（第7～9学年）資格	師範又はその他の専科学校（高等教育2～3年）卒業以上
高級中学（第10～12学年）資格	師範又はその他の大学（4～5年）卒業以上

1995年には「教師資格条例」、2000年には「『教師資格条例』実施方法」が制定された。実施方法によれば、教員資格の申請者は上記の学歴要件のほかに、(a) 一定の標準語能力（検定試験における一定レベル以上の合格）、(b) 身体検査の合格（指定病院での検査）、(c) 人物評価（在籍機関の証明）を要件とし、それらの証明を添えて申請することになっている。上述の表に示すとおり、小学校の教員になるには中等師範学校以上の学歴が必要である<sup>15</sup>。

小学校に英語を導入した2001年当初、英語課程を開設する小学校が急速に増えたことにより、大量の英語教員が必要となった。そのため、師範学校の英語専攻を卒業した学生や、他専攻でも英語の得意な卒業生を募集して教員にする他に、学校内で他教科を担当している教員の中から英語の授業を兼任させたり（例えば、音楽や美術の教員が英語を兼任で教えるなど）、私立学校や優れた英語教員陣が集まっている学校と協力して、2つ以上の学校で英語の授業を兼任させたりもした。

今は、一般に中国の小学校の教員は教科担任制で、英語も英語専科教員が担当することになっている。だが、英語教員が不足している地域では、上述したような他教科と兼任させたり、他の学校と兼職させたりすることで補っている。小学校英語教員になるための英語運用能力を測定するような国の統一的な試験はないが、どのようなルートで英語の教員になったとしても、

教員は研修を受けることになっている。海外の英語教育団体や大学と協力して英語運用能力を証明する英語教員資格取得を促す研修があるし、優秀な小学校及び初級・高級中学の外国語教員を表彰する賞も設けられている。

学生の就職選択については、市場経済の浸透と共に現在は原則として自由となっている。そのため教員養成機関の卒業者も、基本的には、本人と各地域の教育行政機関や学校との交渉によって就職先が決定する。今年の1月、上海のA師範大学の英語師範科卒の学生にインタビューした際に、約70%が小、中学校の教員になり、残りの学生は大学院への進学か、一般会社の就職になることが分かった。

### 3-2. 英語教員の養成課程

上海地区で調査した事例と成果：2010-2013年度の科研費研究により、上海のある師範大学（以下A師範大学と称する）の英語専攻と英語師範専攻の学生を中心に、入学から卒業までの4年間の勉強や成長について現地縦断調査を行った。9月新入生時のTOEFL模擬試験の得点と英語学習についてのアンケートデータを取り、各種の授業見学、カリキュラムの分析、担当教員や学生との面談などを実施した。同じ学生の2年目から4年目に関しても、以上の様にデータを収集した。

①英語学習に関するアンケートデータ：（2010年に一年生96名の英語専攻の学生と、72名の師範専攻の学生）一年時は、英語師範専攻の学生達は自分の文法や読む力に一番自信があり、特に文法力は単語力よりは上だと思っているが、読み、書く、言う、聞く、発音、そして会話力にはあまり自信がなかった。また英語専攻の学生達は同じく文法と読む力には自信があり、会話力は読み、発音、文法より低く、また、書く、聞く、会話力は読む力より低いと自己評価した。しかし2年目の学生へのインタビューでは、学生達は発音や会話力にかなりの自信を持つようになり、発音や書く授業に対する評価が一番高かった。

②TOEFLデータ：最初の2年間のテスト比較データで明らかになったのは次の4点である。①聞く力は40.07から52.64に上がり；②文法力は

52.94から56.13に上がったものの；③読む力は50.24から47.72に下がった；総合成績は507.57から521.57に上がった。このデータから、高校と大学では教育の重点や勉強の方法が異なっているということが読み取れる。学生達は高校で文法や読む力を重点的に勉強するが、大学は、自発表現に力を入れ、発音や会話力を重点的に訓練させる。

3年目は学生の教育実習を見学したため、TOEFL 模擬試験は実施しなかった。去年の12月に3度目の TOEFL 受験を依頼したが、4回生は教育実習や卒業論文作成に忙しく、実際に受験したのは、師範4クラスと英語専攻4クラスだけであり、受験学生の総数は3分の2に減った。

このため、この学生達を対象にした入学当初の1年間の英語力の伸びと4年間の伸びを計測した結果を正しく把握することが難しくなり、以下では、継続的に試験を受けた学生達だけのデータを示している。入学後1年間、リスニング力は有意な伸びを示すが、4回生時には低下を示した。ただし、1回生時を統計的に上回るスコアで卒業を迎えることがわかった( $F(2,66)=49.186, p<.001, \text{Eta squared}=.598$ )。文法・語彙力を見ると、2回生時に大幅に得点が向上し、4回生時もその得点を保持できていた( $F(2,66)=23.528, p<.001, \text{Eta squared}=.47056$ )。読解力は特異な傾向を示し、2回生時には1回生時からの低下が見られ、4回生時では1, 2回生時に比べて大幅な向上が示されていた( $F(2,66)=.624, p<.001, \text{Eta squared}=.19871$ )。最後に TOEFL 総合点は、2回生時に大きな向上があり、4回生時も向上が保持されていた。つまり4年間の成果として、509点が532点に23点英語力が向上したのである。

以上より、当初1年間はオーラルスキルに偏重した学習をしていたが、その後は偏りのない学習を継続したおかげで、4年後の英語総合力としての TOEFL スコア向上に繋がったと解釈できる。

### 3-3. 英語専攻学生の教育実習事例

中国では、英語で授業を行うことのできる教員はどのように養成されているのかについて、上海の A 師範大学で4年間に渡り師範専攻の学

生を追跡調査した。3年目の9月の一週間、師範専攻3・4年生の教育実習の様子を見学し、小中高校英語教員を目指す学生の実習の様子を調査した。

①第四中学校において、師範専攻三年生(女)による中1四班クラスの英語の授業を見学した。使用教科書は Oxford English Shanghai Edition(OESE)で、Unit 4 “Jobs People Do” のテーマを中心に授業を展開していた。45分の間、実習生は流暢な発音で英語を操り、優しく生徒に対応していた。また、PPT の画面と音声を手く用いて授業を進めていた。45分の授業はすべて英語で行われていたが、生徒達は、それに応えることのできる力を備えていた。

②七宝高校において、師範大学4年生、朱さん(女)と采さん(男)の二人の実習授業、高1の英語リーディング授業を見学した。教科書は同じシリーズの OESE で、英語辞書の使い方と単語や文法の確認を中心に、45分の授業を展開していた。二人は PPT の画面と音声の助けを借りながら、流暢な英語を駆使して授業を行っていた。学生を主人公にして効果的に教科書内容を進める、とても充実した内容の授業だった。

### 3-4. 大学英語教育の改革と政策

中国の教育部の下に、大学英語教育の改革を担う三つの全国英語専門家委員会組織がある。それらは、大学外国語教育政策委員会(非英語専攻)、外国語学士プログラム政策委員会(言語専攻)、と中国教育協会、外国語教育機構(小・中・高の英語)である。2002年の福岡で開かれた「アジアにおける英語教育国際学会」での、北京第二外国語学院、呉斎芳教授の発表によると、この英語教育改革の目的は、国家戦略として当時の経済発展による高等教育への需要の拡大に応えることである(1900万の学生に対して、5万人の教員しかいなかった)。それはまた、多くの優秀な高校生を大学に入学させるためでもあった。改革政策案の完成期限は2004年と設定され、学生の Listening と Speaking の能力養成が英語教育の優先的目的とされ、英語教育に最新のパソコン技術を活用することも盛り込まれた<sup>16</sup>。

また、この改革委員会によって1999年に大学英語教育の新しいシラバスも定められ、上級レベルの読む力、中級レベルの聞く、喋る、書く力と翻訳する力を達成することが目標とされた。このシラバスを実現するために、段階的に1) 2002- 2003, “College English Curriculum Requirements” という新しいシラバスが完成され、2) 2004年には4種類の Courseware Systems が4つの出版社から発表された。2004.9-2006.6までは準備段階として、180の大学が実験モデル校として実験を先行し、3) 完成年度の2006年の9月には、430の研究プロジェクトが高等教育部により設置され、全部で400の大学と100万人以上の学生がこの実験に参加した。実験結果はとてもよかった。

### 3-5. 大学英語レベルテストの改革→

#### College English Test (CET4-6) / Band Test

1987年と1989年に、中国の大学英語テスト College English Test-band 4 (CET4) と College English Test-band 6 (CET6) がそれぞれ始まった。1987年に10万人の学生であったが、2004年に1200万の学生がこの試験に参加した。試験の評価に関する変化は以下の通りである：

- 1) 採点の変化：従来の100点満点制から最高点710点に変わり、特別な合格ラインはない。
- 2) 合格書から採点報告に変更した。
- 3) 聞き取り部分の比率を20% から35% に上げ、読む比率は40% から35% に下げた。
- 4) 英語専攻のプログラムには大量のスキル訓練が含まれている。コース別には：精読、速読、聞き取り、会話、作文、翻訳、通訳のほかに、イギリス・アメリカの地理と歴史、イギリス・アメリカ文学、言語学 (Linguistics)、語彙論 (Lexicology)、構文論 (Syntax) 意味論 (Semantics) なども必修科目である。
- 5) 大学までの英語学習の時間割りは以下の表を参照。

Types of English Education hours per week

Primary school 小学校	3
Secondary school 中高	4
Non-English majors 大学非英語専攻	4
English majors 英語専攻	14

学生達の英語習得レベルを測るために、すべての大学生が「大学英語試験」を受けなければならない。これはバンド試験 (Band Test) とも言われ、レベルは2から8まで設けられている。中国の「大学英語試験」は、国家教育部高等教育司が主管する全国統一試験で、1987年より実施されている。また、99年からは「大学英語4・6級口語考試」が試行された。この試験は、1987年から全国大学英語四六級考試委員会に委託して実施されたものである。1989年以降、1月と6月の年2回実施され、毎年240万人が受験している。試験内容は聴解、読解、総合力、短文作成である。8級は大学院の学生が受けるレベルとなっている。

4級：(Band 4) 英語英文専攻以外の大学生は、卒業までにこれに合格することが求められる。国家公務員の条件。6級 (Band 6)：英語英文専攻以外の優秀学生の条件であり、大学院入学の条件でもある。8級 (Band 8)：CET-4, CET-6で優秀点を取り、口頭試験で上位点の者が受験する最上級試験。英語専攻の学部卒業生や大学院の修了生は、この試験の合格を求められる。

日本でよく知られている英語試験と比較するために、Webで以下のデータをピックアップした：



大学英語4・5級考試	資格試験	レベル評価
CET-4	英 検	2級～準1級
	TOEIC	500～600
	TOEFL	480～540
CET-6	英 検	準1級～1級
	TOEIC	650～850
	TOEFL	520～650

## 結論

### 中国と日本における小学校英語教育の課題と改善への提案

1) 今の中国における小学校英語教育は、大都会や地方の実験校または重点校においては、中国語を殆ど使わず英語で行われているが、農村部などで、英語を流暢に話せない教員が英語を担当する場合に、子どもたちが自然なオーラル・コミュニケーションを習得できないのは大きな問題である。政府は利用可能で質のすぐれた視聴覚教材の開発普及に力を入れているが、ここで特徴的なことは、視聴覚教材の利用が広大な国土に巨大な人口の存在する中国の状況に適合しているという考え方である、つまり国費・公費を使って、ネイティブ教員を教室に直接配置することは、政府の責任としまたく想定されていない。優れた教材だけで、遠隔地にいる子ども達が標準的で流暢な英語を喋れるようになる訳ではない。

将来的に見れば、都会の大学で優れた英語学習環境に恵まれた一部の子どもが、正しい発音で流暢な会話ができる人物に成長する可能性はある。しかしその一方で、それ以外の子どもは中国語訛りの英語から脱却することはできない。

農村部の教員不足問題への具体的な措置としては、前述のような遠隔教育手段の普及プロジェクトと、都市部からの優秀教員の派遣事業、および農村部の中堅教員の内地留学研修などが実施されている。特に都市部の教員の等級審査での昇級の要件として、一定期間、農村に（給与はそのまま）赴任させるシステムは、インセンティブを伴う有力な措置であり、今後の効果が期待される。

2) 第一章で、石丸氏が指摘しているように、日本の小学校における英語教育の大きな問題点は、指導教員の力不足と教科書分離問題にある。英語指導教員の指導力不足は、どこに問題があるのか？教科書はどうしたら小、中、高一貫したものになるのか？中国の英語教育と教員養成課程に、なにか参考になるものがあるだろうか？

小学校英語教員の實力不足要因と改善への提言を以下の三点でまとめる。

第一に、「小学校英語教諭には、英語教育について専門的に学んだ経験の無い人が多い。自分の授業に自信を持ってない人も多いであろう。小学校英語教育における最大の問題は、指導者の質である。この事実は、昔も今も変わっていない」（石丸）。この問題を改善するには、中国のように教育大学の英語専攻や総合大学の英語専攻の卒業生で、かつ小学校教諭の免許を取得した人を採用することが一番ではないかと思う。それから、全科目を担当するのではなく、英語だけを指導の方がよいと思う。この方法に変えれば、先生自身も英語力に自信がもてるし、指導力も高まり、プロフェッショナルな技能によって小学生に英語を教えられる。

第二に、プロの英語指導者を世に送り出すために、大学の英語専攻・教員養成制度を変えなければならない。文部科学省が大学の英語教育に全体の到達目標とレベルを図るテストを導入しない限り、今のばらばらな教育方法では一流の英語教員は育たない。教育大学や外国語大学で英語英文学を専門に学んだ学生は別として、一般大学の英語専攻の学生は、卒業時でさえ英語の運用力が乏しい人が多い。学生自身の努力が足りないというよりも、大学の英語養成プログラムや教育法に問題が多く存在している。

英語の授業が英語で行われてないことが、一番の問題だと思われる。こうした授業が行われていないために、英語を使うことに自信を持っていない学生が生まれるのではないか。英語を使うことに自信のある学生を育成するには、大学の英語専攻課程の全体目標、カリキュラム、達成度テストなどを新たに設定しなければならない。



新しい言語を身につけるには、ネイティブからではなく、学習によって外国語を習得した非ネイティブ（指導教員）から学ぶ方が効果的であるようにも思われる。

第三に、小・中・高校の英語教科書の一貫性が欠けているという問題がある。やはり文科省や英語の専門家が指導組織を立ち上げ、小学校から高校までの指導要領と達成度を明確に定めて、一貫性のある教科書を出版社や大学研究者の協力を得てレベルごとに作成することが最も大事であろう。中国のように、英米の語学出版社と共同制作の形で、小学校から高校までの英語教科書シリーズ、CD、DVDなどを統一的に作り、各学校が適切に選んで使用するのはどうであろうか。

近年、インターネットの語学サイトでも、英語指導者用の多様な研修を提供している。例えば、AEONETによると、2003年2月に、英語教育指導者の資格認定を行うNPO 小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）が民間主導で設立された。このJ-SHINEによって認められた「小学校英語指導者資格」を取得すると、小学校での英語教育に携わることが可能になる。すでに15,000人以上の有資格者が誕生し、多くの人が各地の教育現場で活躍している。こうしたコンテンツを利用するのはどうだろうか。

本稿では、小学校の英語教育と大学の英語教育に携わる二人が、日中の小学校英語教育について現状と課題を比較し、さらに改善への方法を提案した。中国に於いては、政府による適切な音声教材や映像教材の提供によって、農村部や遠隔地の英語教員不足の問題解決への一助になるであろう。一方、日本の小学校英語教員の力量不足と教科書問題は、政府の働きかけが重要である。文科省は早急に教員養成の制度を変え、小・中・高の英語学習達成ガイドラインを定め、一貫性のある教科書を開発すべきである。そうすることで、事態は改善していくであろう。

#### 注：

1. 文科省の『英語教育をめぐる情況』サイトから。
2. 文部科学省『諸外国の初等中等教育』、2002年、158～163頁。

3. 注1と同じサイトから。
4. 平成24年度の6年生は、3～5年生が使用している副読本「Sounds Good」の新版を使用する予定である。中学校の教科書の前倒しは、平成23年度で終了となる。
5. 平成24年度からは、授業時間に行う英語活動を止め、週1度15分間の朝学習で、担任が英語を指導する予定である。
6. 教育部基礎教育司・英語課程標準研制組（2002）『全日制義務教育課程標準・英語課程標準解説』、北京師範大学出版社、2002年、6頁。
7. 中国共産党中央委員会・國務院「教育改革の深化と資質教育の全面的展開に関する決定」、2001年。
8. 教育部基礎教育司・英語課程標準研制組（2002）『全日制義務教育課程標準・英語課程標準解説』、北京師範大学出版社、2002年、15頁。
9. 中華人民共和国教育部制訂『全日制義務教育普通高級中学 英語課程標準（実験稿）』北京師範大学出版社、2001年、6～27頁。
10. 日香清人、『恐るべし中国の小学校英語：日中小学校英語の比較』Space ALC 英語、2008年5月14日。
11. 中華人民共和国教育部制訂『全日制義務教育普通高級中学 英語課程標準（実験稿）』北京師範大学出版社、2001年、1頁。
12. 中国教育部『農村中小學現代遠程教育工程狀況介紹』（※農村中小學現代遠程教育工程狀況介紹のホームページへリンク）、2004年12月21日（<http://www.moe.edu.cn/edoas/website18/info7671.htm>）。
13. 新保敦子、Science Portal China、『現代中国における英語教育—小学校英語教育の現場から』、2013年6月3日。
14. 同上。
15. 程曉堂主編（教育部師範教育司組織編）『基礎教育新課程師資培訓指導 小學英語』、北京師範大学出版社、2003年、149～150頁。
16. WEN Qiufang, *History and Policy of English Education in Mainland China*, (National Research Center for Foreign Language Education, Beijing Foreign Studies University) presentation at “The 4th Asia TEFL Conference,” 18-20 Aug. 2006.

#### 参考資料：

1. Carell, P.L. 1983. Background Knowledge in Second Language Comprehension. *Language Learning & Communication*.
2. Mizumoto, Astushi 2008. Exploring the Driving

- Forces Behind TOEIC Scores: Focusing on Vocabulary Learning, Strategies, Motivation, and Study Time. *JACET Journal* 46, pp.17-32.
3. Nation, L.S.P. 1990. *Teaching and Learning Vocabulary*. New York, NY: Newbury House.
  4. Okamoto, M. 2007. Lexical Attrition in Japanese University Students: A Case Study. *JACET Journal* 44, pp.71-84.
  5. Taura, H. 2008. A Comparative Study on University English Education in Japan and China. *JACET Journal* 47, pp. 95-110.
  6. 陸君・田浦秀幸共著, 2011年, “An English teacher training course at a Teachers’ College in China”, *Studies in Language Science Working Paper*, 立命館大学大学院言語教育情報研究科, 第1号, pp.5-10.
  7. 陸君, 2009年3月, 「英語を使える学生が育つための教科書 “Goal-Bound Textbooks for Improving Students’ Ability of Using English – Problems & Tentative Suggestions for English Reading Class”」, 人間学研究, 京都文教大学人間学研究所, Vol.9, pp.1-12
  8. Han Baocheng, 2012年, 「中国の学校教育段階における英語言語教育: CEFR の影響について」『CAN-DO リストを活用した学習到達目標の設定と評価 ～CEFR が日本にもたらす示唆～』(ブリティッシュ・カウンシル、文部科学省)  
<http://www.britishcouncil.jp/programmes/english-education/updates/report-japan/can-do-list>
  9. 本名信行, a) 「近隣諸国における英語教育－中国の事例から」『E・MAX “みんなの広場” : アジア諸国における英語教育－研究報告－』  
<http://e-max-kobe.typepad.jp/emax/2009/07/---7d75.html>  
b) 「アジア諸国における英語教育の取組み－英語非公用語国を中心として」『文部科学省中央教育審議会教育課程部会外国語専門部会（第3回）2004年5月13日』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04052601/004.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04052601/004.pdf)
  10. 石田雅近『英語教員に求められる資質能力と現職教員研修力』  
<http://www.cuc.ac.jp/~shien/terg/ishida%5B1%5D.html>
  11. Kiri-hara Kyoiku Net. アジアの英語教育 総編集 English Education in Asia, The Average Score of TOEFL among Japanese, Chinese and South Korean, English Education Magazine, Web Peripatos, No. 5, Sept, 2003. (Kiri-hara Kyoiku Net.)
  12. 河添恵子, 『アジア英語教育最前線』, 三修社, 2005年。
  13. 鳥飼玖美子, 『TOEFL・TOEIC と日本人の英語力』(資格主義から実力主義へ), 講談社, 2002年, 98頁。

#### 1999年～2000年実施のCBTのTOEFL平均スコア

	中国	韓国	日本
リスニング	53	51	50
文法・構文・ライティング	58	54	51
リーディング	57	56	51
トータルスコア	168	160	152

14. 2012 年11 月28 日に日本の経済同友会の「諸外国と比較した日本の英語教育」という文書には、次のような記載がある：  
『～実行力の違いにより開く韓国との差（米国への日本人留学生数は韓国の1 / 3 以下）～諸外国では国や企業がグローバル競争に勝ち抜く為に、実用的な英語力が必須であるという環境を作り出しています。例えば、小学校の早い時期から会話を中心とした授業を取り入れ、英語による生活体験ができる環境を校内に設けています。現在、韓国のTOEFL の成績は、英語を公用語とする香港と同レベルまで向上しています。また、米国の大学への留学生数では、韓国人留学生が日本の3 倍以上留学しています。韓国が日本の4 割の人口規模であることも考慮すると差は歴然です。』

図1：アジアにおける国別TOEFL 成績の変化推移

国	2005-2006	2007	2008	2009	2010	国	2005-2006	2007	2008	2009	2010
中国	76	78	76	76	77	インド	91	84	87	90	92
香港	80	80	80	81	81	マレーシア	89	87	88	88	88
日本	65	65	66	67	70	フィリピン	85	88	88	88	88
韓国	72	77	78	81	81	シンガポール	100	100	100	99	98

※韓国教育科学技術部資料(2012)より

## 謝辞

今回、本稿に述べた指導内容は、金沢市教育委員会とその関係者の方々のご尽力で作成された副読本や活動事例、また研修会で多くのインストラクターと共有し合ったアイデア、そして日々TTで協力して下さっている担任の先生方のおかげで、私が授業で実践できているものであることを、ここに書き添えておきたい。(石丸千重乃)

今回の論文において、上海で収集した TOEFL やアンケート結果に関しては、科学研究費の共同研究者・立命館大学の田浦秀幸教授から協力を頂きました。

ここに感謝の意を表します。(陸 君)

## *Abstract*

# A Comparison of Elementary English Education between Japan and China

LU Jun  
ISHIMARU Chieno

From 2003, the policy of “cultivating more Japanese with English proficiency” was announced by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan. With the quick development of globalization and severe international competition in politics, economy, and environmental issues, it is indispensable to concentrate all the human wisdom, have further understanding and well cooperation between different countries to solve all the problems and make a better world.

Thus, English education has been taken into great account as an international strategy by many governments, which brings about a fast increase of earlier English education at elementary schools both in Europe and Asia. Thai began to make English as a compulsory course at elementary school from 1996, Korea from 1997, China from 2001, while France started from 2007.

In Japan, from 2011, most of the public elementary schools are required to conduct English activity classes from 5th and 6th grade, while from this year of 2014, most pupils from 3rd grade are beginning to take English as a compulsory class. Therefore, serious problems emerge with this sudden increasing need to teach English at elementary school: how to ensure the qualified teachers, whether to make English teaching qualification as an independent license, how to keep the language teaching quality for Japanese children, and so on.

In order to make clear how to deal with these issues, the two writers are going to explain from different angles the elementary English education both in Japan and China: Mz Ishimaru, from her 10 years’ elementary teaching experience, tells us about the situation in Japan, while Lu focuses on her 7 years’ research in Shanghai to introduce the conditions in China. Finally this paper suggests three proposals for English education in Japan.

Key words: elementary English education, teachers’ training, Japan&China